

令和 元年 6 月 19 日現在

機関番号：18001

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13218

研究課題名(和文)メディアの言説に介在する「二重の誘導性」に関する量的質的研究

研究課題名(英文)a quantitative and qualitative study of "double inducibility" intervening in media discourse

研究代表者

名嶋 義直 (NAJIMA, Yoshinao)

琉球大学・グローバル教育支援機構・教授

研究者番号：60359552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：分担者の担当する量的研究では、新聞の記事の見出しをデータとし、2015年の朝日新聞には、意図的に「(日本)政治」の話題を避けようとする隠された意図が見られることを明らかにした。代表者が担当する質的研究においては、複数の新聞記事本体を通時的・共時的観点から分析して国内外の学会・研究大会・大学主催シンポジウム等において発表したり講演したりし、研究論文も発表した。言語教育授業への応用や批判的リテラシー教育や市民性教育の重要性などについても発表や講演を行った。それらの研究成果は代表者の単著として刊行された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新聞記事の見出しや本文をデータとするだけでなく、新聞社が読者を記事の閲覧に誘導するために幾つかの記事を取り上げて配信している「アラート」を分析対象とし、そこにおける記事の選択に意図的な偏向がありそれが読者を特定の記事から遠ざけていることを量的研究によって明らかにした。またその量的研究を受けて、新聞記事本文を分析して幾つかの誘導の実態を明らかにした。それらの研究成果を言語教育授業への応用や批判的リテラシー教育や市民性教育の重要性などのテーマに発展させ、発表や講演、ワークショップなどを行った。これらは本研究成果の社会的意義として認められる。

研究成果の概要(英文)：In the quantitative research which the research partner was in charge of, the headline of the newspaper article was made to be the data, and it was clarified that there was the hidden intention which intentionally tried to avoid the topic of "(Japan) politics" in the Asahi newspaper in 2015. In the qualitative research in which the representative was in charge, multiple newspaper articles were analyzed from the diachronic and synchronic viewpoints, and they were presented and lectured in academic societies, research conferences, symposia sponsored by universities in Japan and overseas, and research papers were also presented. The presentation and lecture were also carried out on the application to the language education class and the importance of critical literacy education and citizenship education. Those research results were published as a single book by the representative.

研究分野：批判的談話研究

キーワード：新聞見出し 二重の誘導性 批判的談話研究 批判的リテラシー育成 研究書 ワークショップ 口頭発表 論文集論文

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は2013年度から2015年度まで挑戦的萌芽研究として「社会と関わる語用論研究」を行った。国際学会・国際シンポジウムでの発表をはじめ、単著論文だけではなく共編著書籍を出版したり市民公開シンポジウムを主催したりと予想以上の成果を上げることができた。しかし、その研究過程において新たな課題も生まれた。それは、配信される記事の選択に偏りの可能性があることや、見出しから読み取る意味と本文に書かれている内容との間に差異がある記事があり、その結果、見出しから導き出す解釈と本文から導き出す解釈とが異なることがしばしば起こることなどであった。このような偏りや齟齬をすべて排除することは非現実的であるが、その偏りや齟齬を利用して読者に特定の解釈を喚起したり誘導したりすることが可能となることもまた事実である。我々は情報リテラシーとしてそのことを知っておく必要があるが、そのような誘導性の内実について十分に研究されているとは言えなかった。そこで、この言語事象の特徴を明らかにすべく新たな挑戦的研究に取り組むこととした。

2. 研究の目的

(1) 各新聞社やテレビ局が登録者に配信する新着記事案内(アラート)に取り上げられている記事やテレビ番組はたくさんある記事の中から中立的に選ばれているのだろうか。また、その新聞記事やテレビ番組記事の見出しと内容との間に齟齬はないのだろうか。選ばれた新着記事の見出しだけを読むことで記事本文を読んだ時とは異なる解釈を喚起されたり特定の解釈に誘導されたりすることはないのだろうか。本研究ではこれらの特徴を「二重の誘導性」と呼び、その実態を明らかにしたいと考えた。そこで一定量のテキストを収集して調査し、アラート配信される記事とそうでない記事との関係や、見出しと本文との齟齬にどのような特徴が見られるのかを考察することを目的とした。具体的には、まずコーパス言語学的な量的研究を行い、中立性に疑問があるテキストや見出しと内容との齟齬が顕著なテキストを特定する。次に批判的談話研究の観点から質的なテキスト分析を行う。加えて、その成果を語学学習や市民性教育場面で活用し、批判的リテラシーの育成に寄与することも本研究の目的とした。

(2) 当初の研究目的は上で述べた(1)であったが、2016年度の研究を終えた時点でインターネットポータルサイトにおいて配信される新着記事においても紹介される記事がどのように選択されているのかを明らかにするという課題を新たに研究目的に加えた。メールによるアラートを受信するのは自ら登録した読者だけであるが、インターネットポータルサイトの閲覧は誰でも可能であり、そこで配信される新着記事はより影響力が大きく、それゆえ誘導の効果も大きいからである。そこで当初の研究計画の一部を変更し、2017年度においてインターネットポータルサイトの新着記事を量的視点から研究し、2018年には質的視点で研究することとした。

3. 研究の方法

(1) まず、朝日新聞とテレビ番組「時論公論」のHPを対象とし、アラート配信される記事と見出し、それに対応する本文のデータ収集を行う。次にコーパス言語学的手法により、アラート記事がどのような記事の集合の中から選択されていたのかを分析する。また、見出しと本文の内容との関連の分析を行い、いくつかの特徴的な見出しと記事を選定する。

(2) (1)で特徴的とされた記事の中からいくつかを選び、批判的談話分析の枠組みを用いて質的分析を行う。それによって、量的分析と質的分析を融合させた総合的考察を行い、アラート記事の意図的選択による誘導と、見出しで表す内容の意図的選択における誘導、これらの「二重の誘導性」が持つ特徴を明らかにする。

(3) インターネットポータルサイトにアップデートされる新着記事を収集する手法を確立し、実際に記事を収集する。そしてポータルサイトに配信された記事の他に、同時時間帯にどのような記事が存在していたかを調べ分析することで記事選択における誘導性の有無を分析する。

(4) インターネットポータルサイトに配信された記事の中からいくつかを選んで批判的談話分析の枠組みを用いて質的分析を行う。量的分析と質的分析を融合させて総合的考察を行い、インターネットポータルサイト新着記事欄にて配信される記事の意図的選択による誘導と、見出しで表す内容の意図的選択における誘導、これらの「二重の誘導性」が持つ特徴を明らかにする。

(5) 分析対象のテキストに関しては公開済みで広くアクセス可能なものから収集する。著作権等に関しては法令を遵守し十分に留意をしながら、学術的な活用を行う。そのためにも、購入する新聞記事コーパスは研究に活用することが許可されている製品(DVD)を購入した。インターネットポータルサイトは通常のネット環境で誰でもアクセスできるサイトを閲覧した。

(6) 分析対象のテキスト内に登場する個人・団体等に関しては、研究成果の公表時には個人

情報の保護に十分留意して口頭発表や論文公開等を行うこととした。

4. 研究成果

(1) 2016年度の研究結果

2016年度の研究で量的分析の枠組みが構築される目処が立った。2016年度の研究を受け、インターネットポータルサイトにおいて配信されるアラートにおいて紹介される記事がどのように選択されているのかを明らかにするという課題を2017年度以降の新たに研究目的に加えた。取り組むに価する新たな発展的課題を見いだすことができたのは研究の進捗状況という点で大きな意味があった。量的研究の成果が出るまでの間に、研究代表者は独自の視点で新聞記事を選択し、批判的談話研究の質的分析を行い、多くの口頭発表・講演を行い、論文を執筆した。量的研究の進展にはやや遅れが見られたが、新しい課題が見出せたことや、代表者単独で行った質的研究の進展が見られたことで、予想以上の成果が得られたと考えている。

具体的には、庵功雄(分担者)が量的分析を担当した。2015年度版の朝日新聞記事を母集団とし、その中から、購読登録者に向けて発せられるメールによる記事紹介(アラート)による意図的な誘導が確認できる記事と、アラートで紹介した記事の中から、アラートメールの見出しによる意図的な誘導が確認できる記事という、二重の誘導性を可視化する枠組みの構築を行った。研究成果の一部は書籍に収録されたり言語文化教育研究会の招待講演を通したりして公開されている。

名嶋義直(代表者)は質的分析を担当した。本研究で収集したデータを分析し、そこで得た批判的談話研究の知見を社会に還元するため、編著・共編著を2冊刊行した。論文は国際シンポジウム論文集(電子書籍版として一般向けに販売)や紀要に掲載された。口頭発表は国際シンポジウム・海外学会、国内学会等で複数回行った。これらは、「メディアによる誘導」の実態を明らかにするという研究目的を遂行し、その成果を広く市民に還元したもので研究の意義が認められるものである。それ以外に、批判的リテラシー教育に資するため、ドイツの大学に勤務する日本語教師を対象に開催されたワークショップと日本科学者会議沖縄支部主催の研究交流会の講師を務め、本研究において重要な枠組みとなっている批判的談話研究の紹介を行った。

(2) 2017年度の研究結果

2017年度の量的研究は目標を概ね達成し論文の刊行に至った。それに加え、2016年度の研究を受けて新たに設けた発展的課題に分担者が取り組み、分析の枠組みの構築を目指して資料を集めながら基礎的な研究を行った。質的研究は、量的研究が明らかにした「2015年の朝日新聞には、意図的に「(日本)政治」の話題を避けようとする隠された意図が見られること」を質的な面からも明らかにすべく研究に取り組んだが、昨年度の量的研究の進捗状況が影響し、やや遅れ気味で展開した。そのギャップを埋めるべく、研究代表者は独自の視点で新聞記事の質的分析を行い、多くの口頭発表・講演を行い、論文を執筆した。量的研究に一定の成果が出せたこと、昨年度に引き続き、質的研究の口頭発表や論文を公表することができたことなどから、計画に準ずる成果が得られたと考えている。

具体的には、量的研究においては、2015年度の朝日新聞データベースを資料とし、読者に対する記事配信連絡(アラート配信)における「第1トピックの見出し/第2トピックの見出し/トピック以外の注目記事の見出し」、計1335のデータを収集した。そして、それらの記事の関係する「地域と内容」を分析してリスト化し統計的な手法も用いて分析を行った。その結果、2015年の朝日新聞には、意図的に「(日本)政治」の話題を避けようとする隠された意図が見られることを明らかにした。その内容は研究分担者によって論文化され紀要に発表された。

質的研究においては、道徳教育とオリンピック教育に関する新聞記事、政治家の談話を記事にした新聞記事、萌えキャラに関する新聞報道、沖縄におけるオスプレイ墜落記事などを、通時的・共時的観点から分析して研究論文にまとめ、香港や台湾、韓国など東アジア圏を含む国内外の学会・研究大会・大学主催シンポジウム等において発表したり講演したりした。さらにこれらの研究成果を活用し、言語教育授業への応用や批判的リテラシー教育や市民性教育の重要性などについても発表や講演を行い、複数の論文にまとめられた。またそれらの発表内容や論文内容を発展させたものは2018年度に代表者の単著として刊行された。

(3) 2018年度の研究結果

量的研究を担当する分担者は、ヤフーのポータルサイトに随時アップされ更新されていく記事・その見出しをデータとして収集し、そこにどのような記事選択の意図、本研究のいう誘導が見られるかを明らかにする予定であった。この課題は当初の課題ではなく、2016年度の研究を展開する過程で顕在化したものであるが、取り組むべき意義の大きいものと考え、2017年度のデータ収集とそれに関する基礎研究を経て、最終年度1年のみであるが2018年度に取り組むことにしたものである。よって当初から課題解決を完遂することは難しいことが予想されたが、すくなくとも「ポータルサイトにおける記事選択の誘導性」を明らかにする方法論の確立までは行いたいと考えた。代表者が行う質的研究では、まず量的研究が明らかにした「2015年の朝日新聞には、意図的に「(日本)政治」の話題を避けようとする隠された意図が見られること」を質的な面からも明らかにすることが第一の目標であった。「どういう政治記事が、どういう非

政治的記事の見出しによって、避けられているか」について、データを4半期ごとに分けて分析し、1年を通じた傾向を明らかにしたいと考えた。その後、「ポータルサイトにおける記事選択の誘導性」における量的研究においてある程度の研究成果が得られた場合、それらを受け、質的な点からその誘導の実態をさらに明らかにする研究を行うこととした。しかし実際はインターネット情報の特性から「ポータルサイトにおける記事選択の誘導性」の事態を十分に明らかにすることができなかった。ただし、この課題遂行の障害となる具体的な問題点が明らかになったことは次の研究計画を立案する際の糧になると考えている。その点でこの新たな課題に取り組んだ意味があった。

以下、具体的な成果について説明を行う。代表者は2018年度になって、2017年度に分担者が分析した新聞見出し分析データを共有することができた。そして二重の誘導性をあきらかにするための質的研究を行った。四半期のデータのみでの分析と考察であったが、その成果は口頭発表とシンポジウムや研究会論文集論文の形で公開された。また科研費研究の過年度成果を取り込んだ批判的談話研究の研究書(単著)を刊行した。インド・ハイデラバードで開催された国際シンポジウムで特別講義を行う機会があり、その中で科研費成果を反映させた「批判的リテラシー育成のためのワークショップ」を行った。代表が中心となって行った質的研究の成果は民主的市民性教育の展開に応用・発展し、その成果は複数の発表や講演・ワークショップなどを通して社会に還元され、編著本も2019年中に刊行の予定である(現時点で再校正終了)。

分担者の成果は、論文と口頭発表であった。ともに「やさしい日本語」に関するものである。2017年度後半から2018年度にかけて、分担者はインターネット上のポータルサイトから配信される大手新聞社によるニュース記事を収集し、そこで配信される記事の特徴と配信されなかった記事の特徴とを比較することで、ポータルサイトの記事配信にどのような「誘導」があるのかを明らかにする基礎研究を分担していた。ポータルサイトで配信されている記事を収集する手法は確立できて記事も集めることができたが、インターネット上の情報であるため、配信元の大手新聞社記事とのリンクが短期間で切れてしまい、当該記事が配信された時点で「他にどのような記事があり」ポータルサイト上ではどのような記事が取り立てて配信されなかったのか」を十分に分析考察することはできなかった。ただし、今後の研究計画に資する種々のフィードバックを得られたことは成果であったと考えている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

名嶋義直,「日本で働く外国人はどう描かれているか(その2) 新聞記事の批判的談話研究」,『2019 中國文化大學日本語文學系國際學術研討會論文集』, 査読有, 2019, 122-127.

庵功雄,「第2章 学習者の変化に対応しポストを守るための留学生日本語教育と やさしい日本語」, 牲川波都季(編)『日本語教育はどこへ向かうのか』 査読無, くらしお出版, 2019, 57-78.

名嶋義直,「日本で働く外国人はどう描かれているか 新聞記事の批判的談話研究」,『2018 中國文化大學日本語文學系國際學術研討會論文集』, 査読有, 2018, 122-127.

庵功雄,「新聞記事の見出しに見られる「誘導性」に関する定量的考察 朝日新聞の場合」,『人文・自然研究』, 査読無, 2018, 130-143, <http://doi.org/10.15057/29103>

名嶋義直,「日本語教育から民主的シティズンシップ教育へ 批判的談話研究の実践を通して」,『琉球大学国際教育センター紀要』(琉球大学留学生センター紀要通算14号), 査読無, 2017, 15-38.

名嶋義直,「道徳教育とオリンピック教育に関する新聞記事の批判的談話研究」,『日本語教育と日本研究におけるイノベーション及び社会的インパクト』, 香港日本語教育研究会, 査読有, 2017, 176-190.

名嶋義直,「批判的リテラシーの育成を視野に入れた批判的談話研究 安倍首相ビデオメッセージの分析を例に」,『中國文化大學日本語文學系國際學術研討會論文集』, 査読有, 2017, 75-83.

名嶋義直,「教育をめぐる新聞記事の批判的談話研究」,『言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム報告集』, 査読無, 2016. kindle版.

[学会発表](計18件)

名嶋義直,「ことば「だけ」の教育から「民主的なシティズンシップ」の教育へ From Japanese LANGUAGE Education to Education for DEMOCRATIC CITIZENSHIP」, INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LANGUAGE EDUCATION IN

SOUTH ASIA(招待), 2019年.

名嶋義直, 「日本で働く外国人はどう描かれているか(その2) 新聞記事の批判的談話研究」, 中國文化大學日本語文學系國際學術研討會, 2019年.

名嶋義直, 「「いま,ここ」にある社会問題をより深く理解するための批判的談話研究 沖縄オスプレイ墜落事故の新聞記事分析」, 2018年東海大学日本語文化学系國際學術シンポジウム, 2018年.

名嶋義直, 「「いま,ここ」にある社会問題をより深く理解するための批判的談話研究 沖縄オスプレイ墜落事故の新聞記事分析_その2」, 言語文化教育研究学会第4回年次大会, 2018年.

名嶋義直, 「オスプレイは「墜落」したのか「不時着」したのか 新聞に見る,権力に「対抗する談話」と「追従する談話」」, 第24回ひと・ことばフォーラム特別公開研究会(招待), 2018年.

名嶋義直, 「日本で働く外国人はどう描かれているか 新聞記事の批判的談話研究」, 中國文化大學日本語文學系國際學術研討會, 2018年.

名嶋義直, 「新聞記事の見出しに見られる「誘導性」に関する質的考察 朝日新聞の場合」, 第16回 名古屋大学日本語教育研究集会, 2018年.

庵功雄, 「国際日本語」としての やさしい日本語 - 「かわいい日本語に旅をさせる」ために, 日本言語政策学会, 2018年.

名嶋義直, 「萌えキャラのポリティクス」, 言語文化教育研究学会 第3回年次大会, 2017年.

名嶋義直, 「日本語教育から批判的談話研究へ, 批判的談話研究から日本語教育へ」, ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム サテライト企画ワークショップ(招待), 2017年.

名嶋義直, 「新聞記事の批判的談話研究 読解授業での活用」, 第23回 プリンストン日本語教育フォーラム, 2017年.

名嶋義直, 「批判的リテラシーの育成を視野に入れた批判的談話研究 安倍首相ビデオメッセージの分析を例に」, 2017 中國文化大學日本語文學系國際學術研討會, 2017年.

名嶋義直, 「萌えキャラのポリティクス 多様性と拡張性によるヘゲモニー」, 韓國日本語學會 第36回 國際學術發表大會, 2017年.

名嶋義直, 「萌えキャラが媒介する社会のジェンダー性」, 日本語用論学会 20周年記念大会, 2017年.

庵功雄, 「大学における英語中心主義を生き延びるための留学生日本語教育と<やさしい日本語>」, 言語文化教育研究学会第3回年次大会(招待), 2017年.

名嶋義直, 「教育をめぐる新聞記事の批判的談話研究」, 言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム, 2016年.

名嶋義直, 「憲法改正をめぐる新聞記事の批判的談話分析」, 韓國日本語学会 第34回 國際學術發表大會, 2016年.

名嶋義直, 「道德教育とオリンピック教育に関する新聞記事の批判的談話研究」, 第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム, 2016年.

〔図書〕(計4件)

名嶋義直(編著)・中川慎二・野呂香代子・三輪聖・室田元美, ひつじ書房, 『民主的シティズンシップの育て方』, 印刷中, 3-24(ローマ数字), 29-79, 117-141, 169-190, 241-243, 245-246.

名嶋義直, ひつじ書房, 『批判的談話研究をはじめ』, 2018年, 290.

名嶋義直(編著)・庵功雄・今村和宏・大橋純・神田靖子・野呂香代子, ひつじ書房, 『メデ

『イアのことばを読み解く7つのところみ』, 2017年, 1-27, 161-191 . 141-159.

『改憲をめぐる言説を読み解く研究者の会(編著), かもがわ出版, 『それって本当? メディアで見聞きする改憲の論理 Q&A』, 2016年, 3-5, 21-22, 34-68, 92-93, 117-118 .

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 庵功雄

ローマ字氏名: IORI Isao

所属研究機関名: 一橋大学

部局名: 森有礼高等教育国際流動化機構

職名: 教授

研究者番号(8桁): 70283702

(2) 研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。